

インフォーマル・コミュニケーション・エリア 大研究

「喫煙」だけのリフレッシュスペースを
大胆に見直しワーカー間の交流を促すオフィスの仕掛けづくりを!

最近では多くの企業が、リフレッシュを目的としたワーカーの共有スペースを設けています。しかしその一方で、1990年代になって急激に進んだオフィスの分煙化により、「リフレッシュエリア=喫煙室」となってしまったケースも少なくないようです。デスクを離れ、さまざまな部門のワーカーが集まるリフレッシュエリアは、単に休息をとるだけでなく、ワーカーにとって自由な交流の場であるべきなのに、喫煙者によって独占された状況では、社内の活性化につながるインフォーマル・コミュニケーションは促進されません。これからのオフィスづくりにおいて、デスクエリア以外のスペースをどのように有効活用していけばいいのか、企業の実例を交えて考えていきたいと思えます。

オフィスにおける知的生産性の向上が課題に

- ▶リフレッシュスペースの設置が進む
- ▶成果主義やフレックスタイムの導入など「働き方」の変化

オフィス内の分煙化が進む

- ▶リフレッシュスペースが喫煙室化
- ▶煙草を吸わないワーカーからの不満(スモーカー・デバイド)

リストラによるオフィススペースの削減

- ▶デスクスペースと共有スペース(リフレッシュエリア、ミーティングスペース、テーブル席、フリーアドレスなどの導入)を区別したオフィスづくりへ

ナレッジマネジメントへの期待

- ▶インフォーマル・コミュニケーションの時代へ
- ▶より目的を明確にしたオフィスのエリア分けが進む

なぜリフレッシュエリアが 喫煙室になってしまったのか?

高度成長期からバブル景気につながる1980年代まで、日本企業におけるオフィスは、デスクエリアとフォーマルなミーティングを行う会議室という2つの要素を中心に構成されてきました。しかしその後、ワーカーの働き方が多様化し、知的労働の生産性向上が大きな課題になってくるとともに、スペースの利用方法も変わってきたのです。たとえば、さまざまな作業に使える多目的なテーブル席を設けたり、ちょっとした打ち合わせをするためのミーティングテーブルの設置が、1990年代以降、急激に進んでいきます。

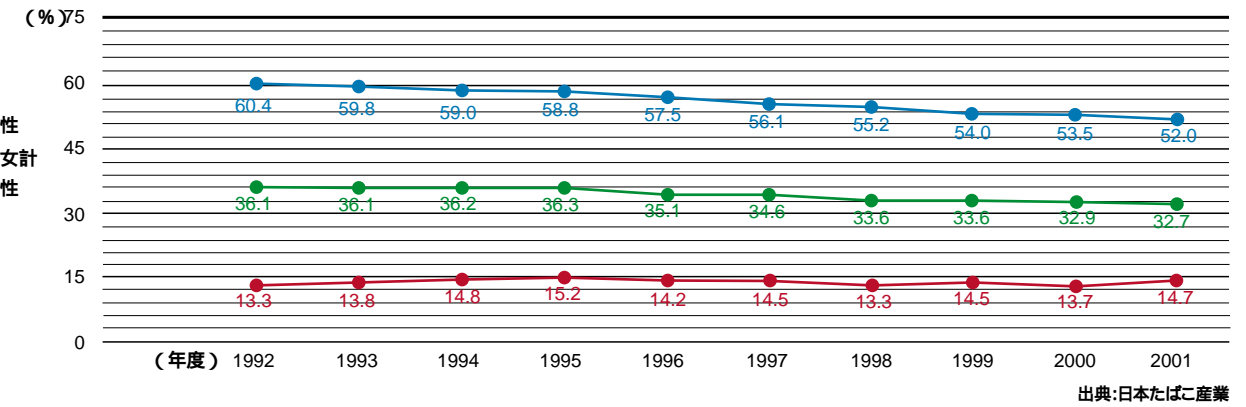
このような流れの中で、多くの企業がリフレッシュエリアの導入を図りました。窓際に設置して外の風景を眺めながら頭の中を整

理したり、お茶を飲んで休んだり、同僚やたまたま居合わせたワーカー同士で自由に話をしたりといった時間は、デスクワークによる緊張を弛緩させる効果があり、まさに気分をリフレッシュさせることができたのです。このため開発や企画の部門だけでなく、営業チームなどでも情報交換の場として重宝されていました。

しかし、ほぼ同時期に進んだ分煙化の流れが、リフレッシュエリアの性格を一変させてしまったのです。

デスクエリアを禁煙とすることで新たに喫煙のための場所が必要になったものの、ただでさえリストラによるオフィスコストの削減が求められる時代にスペースの拡大は望まれません。その結果、リフレッシュエリアが喫煙者によって独占されるようになってしまったことが、多くの問題を生んでいます。

喫煙者率の推移



「分煙」が情報の偏在を生み コミュニケーションを疎外した

もちろん、リフレッシュエリアとは別に専用の喫煙室を設置しようと考えた企業も数多くありました。ところが現在のオフィスビルは換気や空調の設備にフレキシビリティの少ないケースが多く、希望する位置に喫煙室のレイアウトが実現しにくいという事情があります。

したがって、結局はリフレッシュエリアの一角に室内循環型の空気清浄器を設置するのが限界であり、これでは煙草を吸わないワーカーにとって、職場環境の悪化でしかありません。

さらにもう一つの問題があります。結果として狭いスペースに押し込められた喫煙者は、そこで濃密なインフォーマルなコミュニケーションが可能になり、それが仕事上のメリット(煙草を吸わない人にとってはデメリット)になるといえる事情さえ起きてきたのです。現在のビジネスでは通常の業務グループだけで仕事を進めることは少なく、多部門によるコラボレーションや横断的なプロジェクトチームによる活躍が期待されています。つまり組織におけるフレキシビリティへの要求は高まっているにも関わらず、オフィスのレイアウトがそれに対応できていないどころか、「その場しのぎの分煙化」によって、30%~50%以上に及ぶ喫煙者とそれ以外のワーカーとのインフォーマルなコミュニケーションを疎外することになっているのです。

新時代のオフィスは 目的別のエリアの組み合わせに

新しい時代のオフィスの姿についてさまざまな研究を行っている社団法人ニューオフィス推進協議会(NOPA)の最新レポート『中小企業オフィスのオフィスづくり手引書~あなたのオフィスは機能していますか』では、高度情報化社会におけるオフィスのあり方の指針として次のような提言を行っています。

「オフィスにおけるコミュニケーションには、会議やミーティングの場で意見の交換や議論をするフォーマルなものから、廊下や通路などですれ違ったときに立ち話をするインフォーマルなものまでさまざまな形があります」

「インフォーマル・コミュニケーション(を活発にする)には偶発的な出会いの『場』を意図的に作り出すことが大事です。そこでは新しいアイデアが生み出され、異なる部門間の情報交換が期待されますので、リフレッシュスペース、共有のコピー機、プリンタなどの設置場所を人の集まりやすい場所にするなど工夫が必要です」

「パソコンなどによる仕事のウエイトが多い今日、意識的にあるいは計画的にリフレッシュの時間をとり、その疲労を蓄積しないようにすることや、頭の働きを回復することが必要になってきます。機能的で快適なオフィスにするためには、こうしたリフレッシュのためのスペースを確保することが大切です。スペースの有効活用という観点から、リフレッシュスペースをコラボレーションのためのコーナーとして兼用することも可能です」

(NOPA事務局長 小川喜洋氏)

つまり従来のようなデスクエリアと会議室だけでなく、本当の意味でリフレッシュをしたり、部門の枠を超えてワーカーがインフォーマルなコミュニケーションを実現できるような多目的なワークスペースをフレキシブルに組み合わせることで、より知的生産性の高いオフィスが実現できるのです。

リフレッシュエリアの設置や分煙化といったワーカーからの要望は、オフィスづくりを進めるファシリティマネージャーにとって頭を悩ます問題でした。しかし逆に考えれば、働く側のニーズははっきりときているのですから、対策を後手後手に回すのではなく、ファシリティマネージャー自ら明確なオフィスコンセプトを打ち出し、大胆なレイアウトを導入するチャンスともいえるのではないのでしょうか。

企業の情報戦略の根幹をなすナレッジマネジメントは、決して情報システムの構築だけによって実現するものではありません。ワーカーが時間や場所を多様に選択できるオフィスにすることで自然にコミュニケーションの機会は増え、情報が広がっていきます。そしてその仕組みをつくれるのは、オフィスづくりに責任を持つファシリティマネージャーだけなのです。



オープン型喫煙コーナーも登場しはじめた...

排気設備の増設で可能になった オープン型の喫煙エリアに人が集まる 「仕掛け」をすることでワーカーの交流の場に

本誌『オフィスマーケット』の編集部がある三幸エースでは、今年3月、それまでの密閉室タイプの喫煙室をなくし、オフィスのセンターに設置した多目的スペースの中に開放型の喫煙エリアを設置することで、インフォーマル・コミュニケーションの促進を図るようにしました。設計を担当した一級建築士の三輪政幸さんに、今回のリニューアルの目的と経緯について、解説をお願いします。

情報の偏在を防ぐための オープン型喫煙コーナー

今回、三幸エースのFM部門から伝えられたオーダーは、「オープン型の喫煙コーナーのあるインフォーマル・コミュニケーションのスペースがつかれないか?」といったものでした。それまでは、社内からの分煙の要望によって設置された喫煙室があったのですが、狭い部屋で環境もよくなかったうえ、独立した換気設備がつかれなかったため、どうしても外に煙のにおいなどが漏れ、煙草を吸わない人にとっても決して望ましい環境ではなかったのです。

さらにリニューアルの計画を立てる前にワーカーへのアンケート調査を行ったところ、次のような苦情が寄せられていました。
・「煙草を吸う人は喫煙室で自由に情報交換ができるのに、吸わない人間にそのチャンスがないのは不公平だ」
・「どうして、煙草を吸う人だけに休憩をとれるスペースがあり、吸わない人にはないのか」
・「分煙化は必要だが、社内の壁が多くなるのはコミュニケーションを図るうえで大きなマイナスになる」

実際に喫煙室の利用状況をヒアリングしてみると、たとえば担当エリアの異なる営業マンがそれぞれのマーケットの情報を気軽に交換しあうことで新しいビジネスを成功させたり、さらにその情報を聞くために煙草を吸わない人が顔を出すことさえあったようで、これではせっかくの分煙もマイナスの効果を生じてしまいます。

したがって、開放型の喫煙コーナーというコンセプトは十分に理解できたのですが、解決しなければならないのが換気(排煙)の問題でした。

換気(排煙)設備の増設が可能なら 密閉型の喫煙室はいらない

きっちりとした排煙を伴うオープン型の喫煙コーナーの設計は、それまでどの企業でも手掛けたことがなかったため、どのくらいの換気量が必要なのか、資料を探したり、実験しながら探っていました。

1人のスモーカーが吐き出す煙の量はデータがあり、理論的にはそれに人数(今回は8人)をかけた流量の換気ができればいいのですが、実際には想定した人数より多い人が同時に集まってしまうこともありますし、空気の流れは必ずしも計算値通りにはいかないので、最初はその3倍の換気量のあるファンで試してみました。その結果、煙はほぼ排気できたのですが、まだにおいは完全になくなりません。このため、最終的には約5倍のパワー

にして安全率を高めたのです。このくらいの能力の換気設備がつけられるなら、周囲をガラスなどで囲わなくても、厨房にあるようなフードを天井に設置するだけで喫煙コーナーをつくることができます。

実は、設計段階では、煙草を吸わないワーカーから「少しでも



喫煙時の排気量の計算方法

今回の依頼では、喫煙コーナーにおいては最大8~10人が、1時間に2回、煙草を吸うという前提で設計を行いました。
10人×2本=20本
煙草1本を吸ったときに煙の排気量は、ある施設会社の試算によると16.7m³/本になるので、それを乗じます。
16.7×20本=334m³
したがって、必要換気量は最低でも350m³/h程度です。

この数値に対し、最初は3倍程度の余裕が必要だと考え、1時間に1000m³の排気能力があるファンを設置してみました。その結果、煙が滞留することは、ほぼなくなったのですが、FM部門から「においが残る、吸いが弱いのでは?」という意見があり、5倍相当の1500m³/hのファンに交換しました。その結果、現在のところ、煙草を吸わない人からも煙、においを含め、特にクレームは出ていません。つまり、必要換気量の5倍の排気能力が、喫煙コーナーを設計するときの一つの目安になるようです。

コミュニケーションスペース(24坪:81.5m²)、全体の工事費 779万円
(ガラスパーティション、カーペット、フローリング、排煙ダクト、キッチンスペース、照明、椅子、テーブル)
そのうち、オープン型喫煙コーナー(7.8坪:25.8m²)、設置費 210万円
(210万円÷779万円 全体の27%)
排煙ダクト側の費用(ダクト及び開口工事、喚起ファン、天井わり、照明器具) 140万円
床側の費用(床フローリング、喫煙テーブル、椅子) 70万円



コミュニケーションスペース全景

においが外に流れるようなら密閉型に変更してほしい」という要望を受けていたのですが、完成後に確認してもらったところ、まったく不満の声は出ていません。したがって、理論値の5倍の換気能力というのは、このような喫煙コーナーを設置するときの一つの目安になるのではないのでしょうか。

また排煙用のダクトについては、ビルオーナーの承諾を得て喫煙コーナーの隣の機械室を経由し、直接、外に排気できるようなものを新設させていただきました。また、空調の性能に影響を与えない空気量を排気するように計算したことで、追加のエアコンをつける必要もありませんでした。

マグネット効果のあるアイテムで ワーカーが自然に集まる空間を演出

喫煙コーナーのオープン化が可能になったことで、コミュニケーションスペースの設計も次々と進んでいきました。位置的には細長いオフィス空間の中央を半分ほど貫通する形でレイアウトを行っています。ビルのセンターのエレベーターホールから入ってきたら、すぐ目の前にあるうえ、すぐ横にトイレや湯沸室もあるため、自然にワーカーが顔を出せる場所ですが、さらに人を集める「マグネット効果」を高めるために、次のようなものをコミュニケーションスペースに置いたのです。

共用資料のキャビネットとコピーコーナー

仕事でワーカーのほとんどが多用する営業関係の資料をコミュニケーションスペースの横に集めました。ヒアリングの内容に



排煙用のフードが特長的なオープン型の喫煙コーナー

よると、「1日に何回も閲覧やコピーをとる」とのことだったので、そのときに会ったワーカー同士による偶発的なコミュニケーションが期待できます。

タイムカード

出勤や退勤時に必ずそこに立ち寄りますから、そのときにもコミュニケーションスペースにいる人との交流が期待できます。

多目的テーブル

簡単な打ち合わせや、資料を広げての作業ができるテーブルを置き、自由に利用できるようにしました。またLANの配線(イーサネット・ポート)や電源を設置することで、他の営業所のワーカーがドロップオフィスとして使えるようになっています。

キッチン

お茶やコーヒーを煎れるカウンター、ミネラルウォーターや冷蔵庫などをコミュニケーションスペースの一番奥に、喫煙コーナーと並べて設置しました。煙草を吸わない人でもお茶を飲むたびにここに立ち寄りますから、そこにいた喫煙者と会話ができます。

その他、細かい工夫としては、清掃が容易になるように喫煙コーナーの床をフローリングにしたり、既存の家具を再利用することでコストを最小限に抑えています。

オープン型の喫煙コーナーと、それを含んだインフォーマル・コミュニケーション・エリアの設計は、私にとっても初めてのプロジェクトでしたが、ワーカー間の交流を促進させるだけでなく、働き方の多様化にもつながり、社内の評判はかなりいいようです。社外から見学に来られる方も多いそうで、これからのオフィスづくりにおける、一つの指針を示せたのではないかと思います。



キッチンカウンターから見た喫煙コーナー



オフィー アーキテクト アンド
デザインシステムアドミニストレーター
一級建築士
三輪政幸さん

健康管理の面から分煙化は絶対に必要。 コミュニケーションスペースは多様化へ



富士通株式会社

総務部FMグループ
担当部長

青木邦雄氏

インフォーマル・コミュニケーションへの試み

「通常の業務グループのメンバーを超え、広範囲な人とのコミュニケーションによって個人知や暗黙知などの貴重なナレッジの交流を図ることは、これからのビジネスにおいて欠かせない課題です。このため、私たちはさまざまな新しいオフィスの形態を考え、導入を進めています」

富士通における

インフォーマル・コミュニケーション・エリアのコンセプト

1 C-Port

「SEが新しい発想を生み出し、創造的な仕事を行う目的を持ったスペースです。通常のグループメンバー以外との部門間コミュニケーションによるシナジー効果を生み出すために、オフィスのセンター部分にベンダーやコーヒーマシンを置いたドリンクスポット、雑誌や新聞を閲覧できる情報センター、資料を広げての作業や簡単なミーティングのできるシッティングポットを設置してあります」

2 Club Area

「C-Portよりリラックスしたコミュニケーションが行えるように工夫されたスペースです。オフィスの隅に設置することで、頭の中を仕事と切り離しリフレッシュできるようにしました。機能としては、情報センターやエスプレッソバーに加え、休息のための低いソファやカウンター、ちょっとした打ち合わせにも使えるシッティング・ヒーリングというスペースを設けました。ここには水槽や観葉植物も置いて環境を変えるようにしています」

3 Chat Hub

「サイバー空間とリアル空間をつなぐハブとしてのスペースを目

指しました。マガジンコーナーやドリンクサービス、コピーマシンなどを置いて人が集まるようにし、コラボレーションが進むようになっています。デスクスペースとの違いを明確にするために、ガラスではなくグラフィックを施した収納庫で区切りましたが、そこに穴を開けて、通りがかりに覗けるようにしています」

社内の分煙対策について

「富士通では富士通病院や健康管理部門からの指導により、全社的に分煙対策が進められており、喫煙は限られたスペースだけで可能です。コミュニケーションの促進という意味からはオープン型が理想ですが、ネックになるのは換気設備ですね。社有の建物であれば排煙ダクトの設置により半オープン型にすることができますが、ほとんどの賃貸ビルではそれらの対応がとられてなく、しかたなく密閉型になっています。新しいビルほど窓も開かず、ビルそのものが密閉の傾向が多い。今後、これについては、ビル側の対応を強く望みたいですね」

これからのオフィスづくりの方向

「15年ほど前にリフレッシュコーナーをつくり始めましたが、分煙化の過程で喫煙室になってしまったため、現在では廃止しています。そして新たに考えたのが、紹介した3つのコミュニケーションスペースなのです。部門や職種によって仕事の内容が異なるように、交流の仕方も決して一様ではありません。したがって、このようなエリアのパターンは画一的にせず、それぞれの職場に合った最適なスタイルのものを工夫するのが、ファシリティマネージャーの役目になるのではないのでしょうか」



シッティングポット。座位での比較的落ち着いた作業環境を提供。資料を広げながらPC操作ができ、簡易なミーティングを可能にする可動型ホワイトボードを装備している



エスプレッソバー。隣にベンダー、コーヒーマシン等を備え、インフォーマルな雰囲気を出しているエリア



クラブエリア。低いソファやカウンターで、水槽や観葉植物を眺めながらリラックス。コミュニケーションを図ることもできる

広いスペースをとった多目的ラウンジで 喫煙者も含めたコミュニケーションが可能に



オムロン ファシリティクリエイティブ株式会社

東部サービス部 部長

小林茂良氏

インフォーマル・コミュニケーションへの試み

「いろいろな人が集まる場所ほどおもしろいコミュニケーションができる。そんな考えから虎ノ門、大崎事業所につくったのが多目的スペースであるラウンジです。テーブル席を中心に、数十人が利用できる広さを確保しています。

利用の仕方はさまざまですね。昼は弁当の販売をしますので食堂代わりになりますし、それ以外の時間でも、気分を変えて仕事をするワーカーや、簡単な打ち合わせをする人、お茶を飲みに来る人など、常に誰かが集まっています。

ちなみにオムロンでは社内課金制度があり、会議室は有料になっています。このため、『そこまで構えてしなくても』といったミーティングはラウンジで頻繁に行われており、完全にインフォーマル・コミュニケーションの場になっています」

社内の分煙対策について

「10年ほど前から分煙を実施しています。まずデスクエリアでは200人ほどのワーカーがいるスパンごとに喫煙室がありますが、ここはスペースも広くないうえ、ビル設備の関係で新たな排煙ダクトをつけることができないため、決して居心地がいいとはいえず、喫煙者の緊急避難室のようになっていますね(笑)。ガラスのパーティションで密閉してあるので外からは見えますが、どうしてもおいが漏れるので煙草を吸わない人にとっては近づきにくく、コミュニケーションエリアとしての利用は期待していません。

むしろ、その用途はラウンジが果たしています。例えば大崎では窓際を喫煙テーブルにして室内分煙になっていますから、煙草を吸う人も吸わない人も同じ空間を共有できます。天井への換気と空気清浄機の増設を行っているので、全体に面積が広いこともあり、今のところ、煙草を吸わない人からの苦情は出ていません。ただ、

完全に外部への排煙ができないことで、おおいの問題は残るかもしれません。賃貸ビルも、こういった新しいニーズに応えてもらいたいものです」

これからのオフィスづくりの方向

「煙草の煙は、吸わない人にとってはセクハラと同じような排除対象ですから、ファシリティマネージャーはワーカーの声に耳を傾けて、分煙対策を進めなければなりません。虎ノ門、大崎事業所の場合は、広いラウンジを設置できたため、そこでも喫煙が可能ですが、そういうスペースの工夫ができなければ、密閉式の喫煙室をつくるしかありません。

いずれにしろ重要になってくるのは換気設備です。最近のビルの非開放式の窓では、ガラス壁の一部を破って換気設備を設置するとすると約1000万円、退去時の原状回復費用も入れると2000万円くらいになりますから、事実上、設置はできません。

理想を言えば、すべてのオフィスビルは、あとから外部への排気設備を増設できるように、壁にダクトを通すための穴を最初からあけておくとか、そういう工夫が必要です。あるいは、もともとすべてのビルには火災のときに使う排煙ダクトが天井に配管されているのですから、これを有効活用する方法だってある。現在、排煙ダクトは非常用設備であるため、通常の換気には使用できない場合がほとんどなのですが、これだけテクノロジーが発達しているのですから、1本のダクトを通常の排気と非常用の排煙に使いわけることだって不可能ではないでしょう。

どこのオフィスでも、3割から5割程度の喫煙者はいるはずですが、それを分煙というかたちでわけてしまえば、コミュニケーション面で大きなマイナスです。したがって、もっとフレキシブルに換気設備を増設できるようなビルがあれば、次のオフィス探しのときには重要な選択ポイントになるでしょうね」



フロアに設置されている喫煙室。煙草を吸うためのスペースのため、特に椅子は設けられていない



喫煙できるスペースを設けたコミュニケーションルーム「ラウンジ」。簡単なミーティングから食事など多目的に使用できる



喫煙スペース上に設置。煙草の煙をビルの外に直接排気するシステムで、排気設備を強化しているため、非喫煙者からの苦情はでていない

さまざまなワークシーンを想定した オフィスづくりでコミュニケーションの機会を 増やしていくことが大切



富山化学工業株式会社

取締役兼執行役員
総務部長

山下晶章氏

インフォーマル・コミュニケーションへの試み

「当社で行った調査では、フリーアドレス自体がチームの垣根を越えたコミュニケーションを活性化させていることが判りました。そういった調査結果からも、さまざまな形でインフォーマル・コミュニケーションができるように工夫しています。」

たとえば営業所では、オープンエリアミーティングといて、2~3人用のミーティングテーブルを多数配置し、気軽に情報交換ができるようにしました。ちなみにそのテーブルは座った人が90度で話ができるようにデザインが工夫されており、対面の場合に比べて気軽に話ができるようになっています。

また談話室やリフレッシュルームなどもスペースのある限り設置し、さまざまな出会いの機会を演出することにも努めました。

一方、フォーマル・コミュニケーションについても、全体会議などで必要以上に移動時間をとらないでいいように、すべての営業拠点に早くから電話会議のシステムを導入するなど、情報交換のスタイルの多様化は確実に進んでいますね。」

社内の分煙対策について

「自社ビルである新宿の本社では、各フロアの廊下の自動販売機スペースに喫煙コーナーを設置しています。給湯室の近くなのでダクトを伸ばして換気扇と空気清浄器を増設しました。」

6階にある談話室はオープンな環境であり、吸わない人とのコミュニケーションも可能ですね。ちなみに最初は空気清浄器だけを置いたのですが、においの問題などから新たに換気扇をつけることで、これらの問題はほぼ解決しました。

賃貸ビルにある営業所では、そこまで設備をつくれないケースが多く、リフレッシュルームに空気清浄器を置いて喫煙室を兼ねています。理想的には、煙草を吸う人も吸わない人も同じ空間を共有できればいいのですが、そのためにはビルの外に直接排気できる換気設備が必要であり、現在のオフィスビルはなかなかそこまで対応できていません。このため、どうしてもにおいが残り、煙草を吸わない人にとっては不満の声もあるようです。」

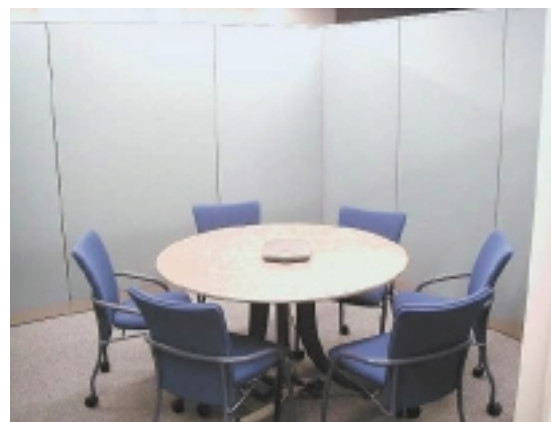
これからのオフィスづくりの方向

「フォーマルなものもインフォーマルなものも含めて、これからはコミュニケーションの機会を増やすオフィスづくりが重要でしょう。ただこれも、あまり大上段に構えて『こんな設備をつくらなければ!』と考える必要はないと思います。最終的にオフィスの使い方はワーカー側も工夫しますから、ファシリティマネージャーとしては、ある程度、自由に使える空間を、いろいろなパターンで用意していければいいのです。」

そして運用を始めてからワーカーの意見を聞き、修正していけば、満足できるオフィスは実現できるのではないのでしょうか。」



情報コンセント、電源を天板下に装備。外の景色を見ながらSOA作業が可能な多目的カウンター。また、資料検索やオフィス外の営業が立ち寄った時のタッチダウンオフィスの役目も担う



丸テーブルにより、人数の変動に対応可能で、コミュニケーションもとりやすく電話会議がスムーズに行うことができる

「おいしいコーヒーが飲める」と いうだけでもワーカーが集まりコミュニケーションが生まれる



エクソンモービル ビジネスサービス株式会社

ジャパンファシリティ&オフィスサービス
マネージャー

川村 裕氏



ジャパンファシリティ&オフィスサービス
ファシリティマネージャー

渡辺隆治氏

インフォーマル・コミュニケーションへの試み

「品川オフィスにはマルチパーパスルームと呼ばれる多目的な空間を設置するようにし、ワーカーのインフォーマル・コミュニケーションを可能にしています。マルチパーパスルームで実験的にコーヒーショップにスタッフを派遣してもらい、販売を始めたところ、非常に好評でしたね。昼食時以外にもそこに立ち寄るワーカーの間で交流が生まれ、マルチパーパスルームの利用率はかなり高まりました。」

このような共有のスペースは原則として禁煙であるため、私たちはただ空間をつくるだけでなく、人の集まる工夫をいろいろと考えています。たとえばコーヒーの販売機一つにしても、ワーカーの意見を聞いてできるだけおいしいものにするだけでなく、運用コストを比較して、できるだけ経費を抑えることに成功しました。」(渡辺さん)

社内の分煙対策について

「アメリカ系の企業であるため、煙草に対しては非常に厳しい方針があります。基本的にはオフィス内はすべて禁煙なのですが、日本法人の場合はお客さまが煙草を吸われるケースが多いのと、喫煙率も米国に比べて高いため、密閉型の喫煙室をフロアごとに設けています。」

もちろん排煙には万全をつくさなければなりません。したがって喫煙室は給湯室やトイレなどの近くに置き、ダクトによる排煙と空

気清浄器の併用により、煙だけでなくにおいが室外に漏れないように設計しました。

喫煙室においてインフォーマル・コミュニケーションが行われ、吸わない人との間に情報の格差があることは承知していますが、全社的な方針として禁煙と完全な分煙がルールになっているため、オープン型の喫煙コーナーの設置や、共有スペースにおける喫煙は絶対に許されません。このため、マルチパーパスルームなどに人の集まる工夫をすることで、そこにおける非喫煙者を含めたコミュニケーションに期待しているのです。」(川村さん)

これからのオフィスづくりの方向

「エクソンモービルでは『セールスはマーケットの近くにいるべきだ』という考えから、テリトリーごとに小さいオフィスを設置したり、SOHOの導入を積極的に進めています。しかし、どんなオフィスでも共通の環境を提供しなければならないため、たとえば什器備品を統一するなどのルールづくりが新たな課題になってきました。」

またこのような状況でワーカー間のコミュニケーションを図るためにはイントラネットの充実も大切で、最近ではチャット形式の掲示板に自由に書き込めるスタイルの採用により、バーチャル的なインフォーマル・コミュニケーションを可能にしました。

これからはオフィスと情報システムの両方がそれぞれ補完しあひながらコミュニケーションの促進を図っていく時代なので、ファシリティマネージャーも広い視野でオフィスづくりを進める必要があるのではないのでしょうか。」(川村さん)



マルチパーパスルーム。日中のミーティング以外にクラブ活動や食事・休憩などリフレッシュの場として多目的に利用できる。奥には、本格的な和室も用意



各フロアに1カ所ずつ設置している。室内の煙は、直接ビルの外部へ排出する空調システムを採用。職場の衛生環境を徹底的に追求したクリーンエア設計になっている

インフォーマル・コミュニケーション・エリア & オフィスの喫煙対策

JTもオフィスの喫煙対策には高い関心

ここまで、さまざまな企業におけるインフォーマル・コミュニケーションとオフィスの喫煙対策の事例を紹介してきましたが、たばこの供給側である日本たばこ産業株式会社（JT）ではどのような工夫をしているのでしょうか。

「うちの場合はオフィス内でも喫煙が可能ですが、自社ビルであるため強力な換気設備の設置が可能で、特に問題は生じていません。もっとも、採用の段階で分煙をしていないことは必ず伝えますから、たばこを吸わないワーカーも、納得して働いているのだと思います。」（コーポレートコミュニケーショングループ パブリックリレーション部 マネージャー・田川誠さん）

しかしその一方で、多くの企業で分煙化が進むことについては、「喫煙者・非喫煙者双方の立場を配慮したものであれば、むしろ嬉しいこと」と考えているそうです。

「たばこを吸わない人にとって煙が迷惑だとお感じになる方がおられるのはたしかですから、喫煙者と非喫煙者の共存ということから、適切な分煙は必要でしょう。そのルールを守ることも、喫煙者のマナーだと思っています。」（コーポレートコミュニケーショングループ マネージャー・向井芳昌さん）

さらにJTでは、会議室や応接室などの共有スペースでも効率的な換気が可能なアンダーフロアからの換気設備を建設会社と共同で開発するなど、コミュニケーションと分煙の両立に高い関心を持っているようです。

「たばこについてリスクだけが強調されることがありますが、私の場合はパソコン作業などで疲れた頭を休めるときに、有効なアイテムであると思っています。喫煙者は、それぞれ様々な想いで喫煙を嗜んでいるでしょうし、喫煙が仕事をすすめる上で有効に機能している方々も多いでしょうから、喫煙を一方向的にいけないことと捉えるのは、いかげななかなと思いますね。」（向井さん）

そして喫煙コーナーのインフォーマル・コミュニケーションも、ビジネスには有効です。

「私は社内報の制作を担当しているため、いろいろな社員から情報を集めていますが、正式なルートでは手に入らないネタも、リフレッシュコーナーで一服しながらだと気軽に聞けることがある。おそらく多くのビジネスにおいてこれは有効なシチュエーションでしょう。それだけに、たばこを吸わない人に迷惑をかけず、お互いが交流できるようなオフィス環境の実現には、私たちも積極的に協力していきたいですね。」（田川さん）

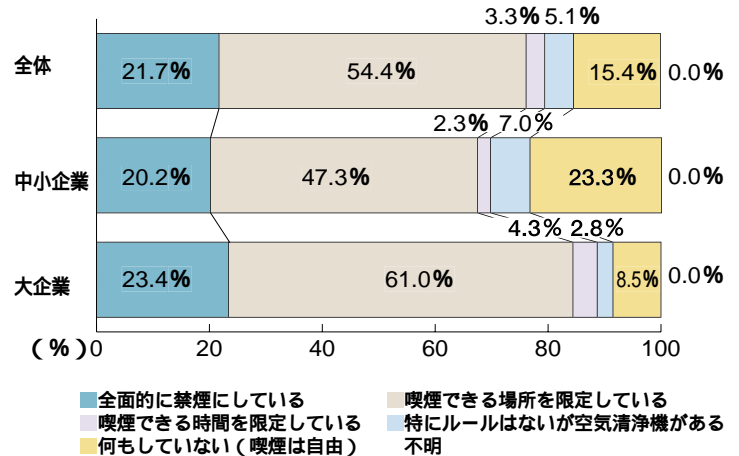
日本企業における喫煙対策の現状は？

社団法人ニューオフィス推進協議会（NOPA）が、毎年、行っている「オフィス実態調査」によると、1999年の段階でオフィス内を全面的に禁煙にしている企業は全体の21.7%で、これは前年より2ポイントほど上昇しています。

また「喫煙できる場所を限定している」企業が54.4%ですから、4分の3以上のケースではデスクにおける喫煙は禁止されていることになります。

これらを業種別に見ると、最も厳しいのは金融・保険業。「全面禁煙」「喫煙場所を限定（分煙）」を合わせた社数は約94%で、平均を大きく上回ります。逆に建設業などは対策が遅れており、デスクにおける喫煙を禁止している企業は全体の6割以下に留まっているようです。

企業規模別のオフィスにおける喫煙対策



コミュニケーション推進に役立つマニュアル

社団法人ニューオフィス推進協議会（NOPA）では2002年3月に最新のレポート『中小企業オフィスのオフィスづくり手引書～あなたのオフィスは機能していますか』を発刊しました。内容の一部は本文中でも紹介しましたが、ここではリフレッシュスペースの設計におけるアドバイスの部分を要約してお伝えします。

1 家具・素材

ただ椅子やソファを置くだけでなく、執務スペースとイメージを変えることが重要。内装の仕上げを木質系や繊維系の有機質のものにしたり、照明を暖色系のものにするなどの方法がある。

2 外気・眺望

リフレッシュスペースには自動販売機や給茶器を置くだけでなく、外気や外光が取り入れられる眺望のいい位置に設置することにより、飲みものなどと一緒に外の景色を楽しむことができ、より気分転換ができる。

3 分煙（喫煙・禁煙）

喫煙者も非喫煙者もお互いの居心地のいい環境でリフレッシュできるように分煙などの工夫が必要。

4 アート・植栽

アートや植栽などをより多く設置することでオフィスに潤いが生まれ、快適な空間になる。

問い合わせ先：<http://www.nopa.or.jp/>